

今夏は記録的な猛暑が続いたと思えば、一転して各地で豪雨が相次ぐなど不安定な天気だったが、夏の暑い日、からからに渴いた喉を潤す冷たい水の心地よさは、なにもものにも代え難いものがあるのではないだろうか。

現在、日本では全国どこ

でも水道の蛇口をひねれば、飲用に適した安全な水が出てくるといふ恵まれた環境にある。もちろん最近では、普段口にする水は味などの面も考慮して、ペトボトル詰めミネラルウォーターを使っている方も多いのではないかとも思われるが、こと青森県では水道水の味も決して悪いものではない。

なかでも、

1984(昭

和59)年に旧厚生省が開いた研究会において、「日本

一おいしい水道水」という

評価を得たこともある青森

市の水道水はその白濁とも

言えよう。

こうした青森市であれ

うな水質については問題視

ば、都市化や工業化等によっても水需要が増加したため、藩政期から水道開設計画は明治維新の混乱で実現に至らなかったが、廃藩置県後に県庁が青森に移転すると、県外から来た官吏が飲料水の不良で体調を崩すことが相次ぎ、住民の健康も水のために害されていると認識されたことから、県も青森に良質の水を供給する必要を認めることとなった。

安全な水を求めて

青森市の水道事業

石塚 雄 士

(県民生活文化課)

県史編さんグループ

これは、元来低湿地などが広がっていた場所に開かれたという青森の立地条件に起因するもので、水需要を賄うために各所に掘られた井戸からは、有機物を大量に含む、黄色みを帯びた水しか得られなかったとい

う。

当然、住民たちもこのよ

うな水質については問題視

足がちであり、加えて数度

の伝染病の流行によって水質の問題が改めて浮上すると、再び水道敷設の気運が高まることとなった。

1893(明治26)年から再び議論が始まった水道敷設計画は、明治三陸地震などの災害や日清・日露戦争、工事費確保の問題などによる挫折を繰り返し、具体的に計画が動き出してからも、水源とした横内川の用水問題が浮上するなどの紆余曲折があった。

こうして1874(明治7)年に県主導で青森への水道敷設計画が立案されたのだが、起工の準備段階で試掘した井戸からやや良質の水が得られたことから、敷設に要する予算等の点も勘案され、一時頓挫することとなったのである。

だが、その後も北海道開拓の進展や東北線全通などで著しい発展を遂げた青森では、飲料水の供給量が不

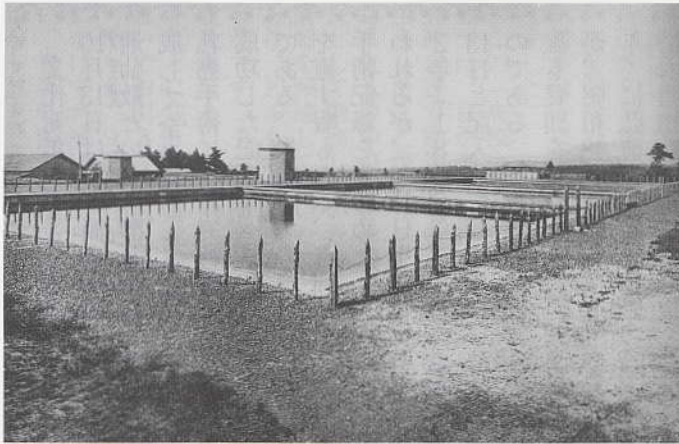
足がちであり、加えて数度

の伝染病の流行によって水質の問題が改めて浮上すると、再び水道敷設の気運が高まることとなった。

1893(明治26)年から再び議論が始まった水道敷設計画は、明治三陸地震などの災害や日清・日露戦争、工事費確保の問題などによる挫折を繰り返し、具体的に計画が動き出してからも、水源とした横内川の用水問題が浮上するなどの紆余曲折があった。

しかし、それらの問題を乗り越えて青森市の上水道は1909(明治42)年12月、全国17番目の近代的水道として完成し、長らく住民を悩ませてきた飲料水の水質の問題はここに解消されることとなったのである。

水道の蛇口から流れる水を見るとき、安全でおいしい水を求めた先人の苦勞の歴史に思いを馳せてみれば、ただの水道水の味わいもまた変わってくるのではないだろうか。



大正期の青森市横内浄水場 (青森県史編さん資料)